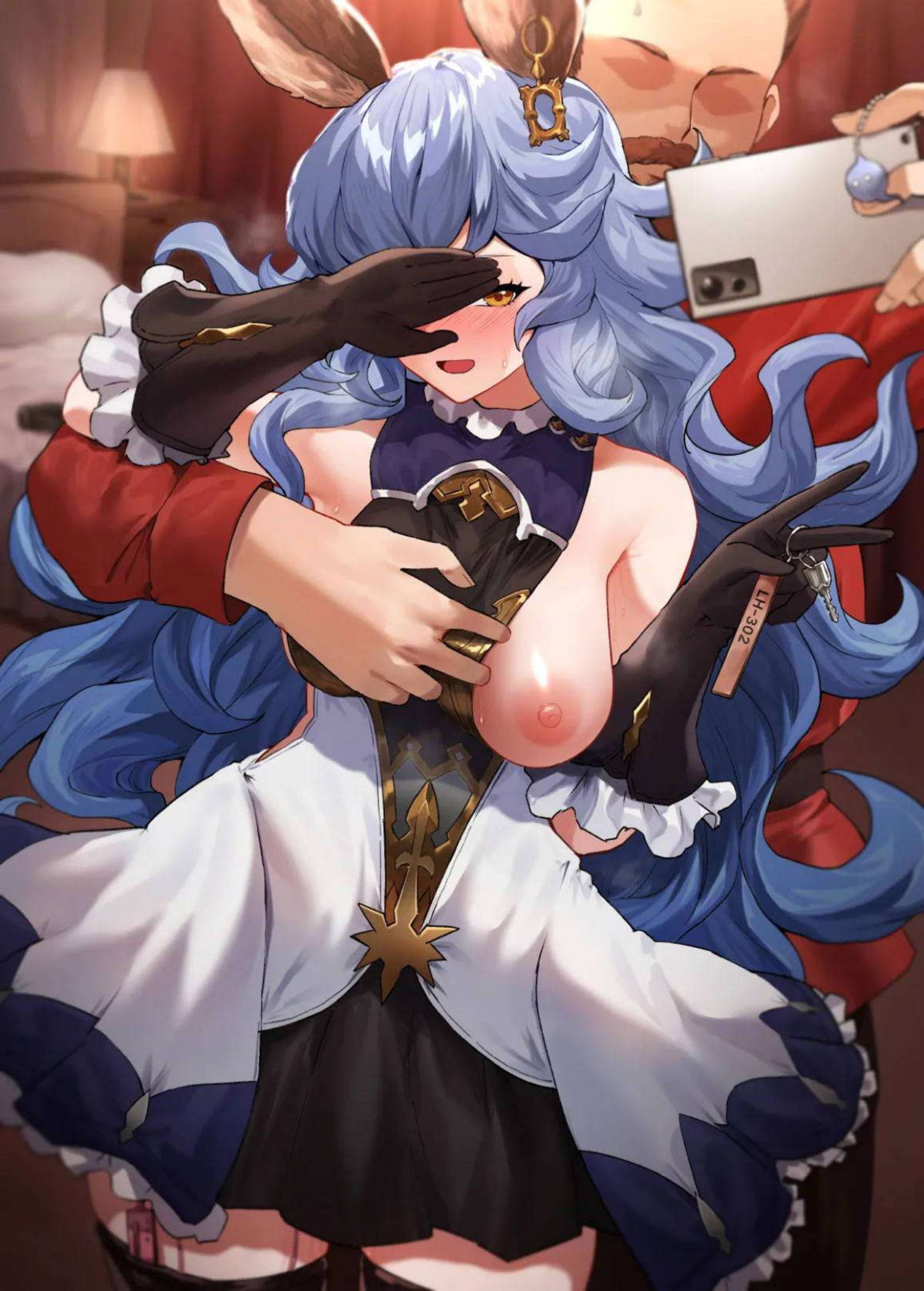




とあるホテルの一室

久しぶりだな……
約束通り来たぞ♡

久しぶり、夏以来だね
フェリちゃんに
また会えて嬉しいよ

もしかして……おっと……
しっかり入れてきてる
じゃないか
準備万端って感じだね

……お前が言ったんだぞ

いい子だ
今日はたくさん
気持ちよくしてあげるからね

んっ♡

あ♡

アキマ

しっ……

ところで団長さんには
なんと言ってここに来たんだい？

…プレゼントを買って

プレゼントねえ
フェリちゃんらしい
今日は帰れないよ？
明日は仕込みがはいんだから
泊まっていきなさい

…でも…

グランくんには
店にお泊りするって
言いなさい
分かったね？

分かった♡



そろそろ
イクよ！
フェリちゃん！

イクッ！！

せーし来た♥

子宮の奥にせーし打ち付けられてるッ♥

おぉ

でっかい
おっ

ビュ

ビュ
ビュ
ビュ
ビュ

ビュ
ビュ
ビュ

おっ

おっ

ふう〜出た出た♥
久しぶりの中出しで
とても興奮したよ♥

びゅん

ビュッ

うおお
締め付けすごっ
抜けないよッフェリちゃん

明日のクリスマス
パーティーでもたくさん
出してもらえるから
今晚から楽しもうね♥

12月27日、僕の手元に1つの動画が送られてきた。
動画にはホテルの一室を訪れるフェリが映っていた。
動画内の日付は12月23日、クリスマススイープの前日だ。
あの日、彼女は「プレゼントを買いに行く」と言って出かけた。
それから彼女は3日間騎空艇に戻ってきていない。

男がフェリのスカートを摘まみ上げる。
黒いレース状の下着が露になり、そこから1本の
紐がはみ出ている。男がその紐を引っ張ると
彼女の下着からヌルツとピンク色の物体が滑り落ちた。
それは小さなバイブローターだった。
彼女はあの日、僕に「出かける」と声をかきたあの時から
既に自分の性器に玩具を挿入していた。
「そんなはずはない」「何かの間違いだ」
そんな僕の疑念はすぐに破綻した

ローターのせいなのかフェリは火照って
顔が赤くなっていた。
男を見つめるフェリの顔は、まるで
意中の人を前にしたような女の顔だった。
男とフェリが互いに見つめあった数秒後、
2人は唇を重ね合わせキスをし始める。
互いの口内を舐めまわすように舌をねじ込む
濃厚なディープキス。互いに舌を吸い付き
あう様はまさしく心を寄せ合う男女の姿で
彼女の心にはもう僕の姿は無いのだと
僕は実感し始めた。

長い時間、男がフェリに愛撫を続け焦らされたフェリは等々自ら腰を突き出して、性交をねだるようになった。男が自分の一物を彼女の性器に押し当て、勢いよく奥まで挿入する。僕の聞いたことがない声がフェリの口から漏れ出した。

彼女は一切嫌がることなく男との性交を楽しんでいるようだった。互いの名前を呼びあいながらも獣のような交尾をする彼女に僕は別人であつてほしいとただ願うしかなかった。

男が彼女の性器からペニスを引き抜くと彼女はぐったりと足を開けて倒れ込んだ。普段の彼女からは想像できない下品な姿に僕は不意に興奮してしまった。男が彼女の性器の奥まで見えるよう指で広げる。綺麗なピンク色の陰唇が露になるもその形は先ほどまで挿入されていた男のペニスの形状を維持したままだった。



イクッ!!

男がそう言うのと腰を勢いよくフェリの臀部に打ち付けた。
男はフェリと完全に合体した密着の状態射精を開始する。
まるで時が止まったかのような長い射精。
フェリは男の射精をそのまま受け入れているようだった。

フェリは幽霊だから妊娠はしない。
男はそれを知っているのだろうか。
それとも知らないのだろうか……
彼女は一体どんな気持ちで彼の射精を、
精液を受け止めているのだろうか。

男がペニスを引き抜くと彼女のまんこからドボツと大量の黄ばんだ精液が溢れ出てきた。
どれほどの量の精液を射精したのだろうか。
彼女の子宮に精液を吐き出す快感は一体どれほどのものだったのだろうか。
僕以外の男の体液で彼女の胎内を犯された事実、
僕は目を合わせられずビデオを閉じた。







12月27日、僕の元に一通の封筒が届いた。
中には1枚の写真だけ……。
クリスマスマスの衣装を来たフェリの写真。
何人もの男に犯されたのだろう、体液まみれのフェリ。
複数回の性交と中出しによって泡立った性器。
以前のビデオに映っていた男とはまた別の男も映っている。
人嫌いの彼女がなぜ彼らとどうも親密になったのかは
もう僕の知る由がない。。。。。

またこ
こにいた
て

気が付くと僕はこの写真で何回もオナニーし射精して
しまっていた。クリスマスマスの日、彼女はグランサイファーに
帰って来ることなく知らない場所で何人もの男と
セックスしていた事実には僕はただ一人で鬱憤を晴らす
しかなかった。

12月28日、彼女は普段と変わらない表情で
いつも通りに僕に話しかけてくるのだった。



ごちそうさま
でしたっ



ごちそうさま
でした



まごころ
こえていたへ



うっすらと覚えているのは
彼らの精液を何回も飲んだことと
無遠慮に中出しされたことだけ

でも嫌な気分じゃ
なかった

精液ってようは赤ちゃん作る子種だろ？
幽霊の私だからかもしれないけど
お口やおまんこに出してもらえると
不思議と体がポカポカするんだ♥







